

対話から生まれる空間の気配 仕切ること/キョリをとること

20643021 遠藤 杏子
指導教授 小形 徹

■興味の発端：領域・仕切り・キョリ

公園にシート広げ、人々が思い思いに時を過ごす、そんな光景。それぞれの場所、それぞれの時間。そこには不思議な一体性が存在している。お互いの領域を決められているわけではなく、感覚的にまわりとのキョリをとりながら自分の居場所を決めている。そこにはさまざまなキョリが存在しながらも、いろいろなことがあいまいなままに、成り立っている。そういう空間の成り立ちをととても自然で魅力的なことだと感じた。

■事前研究：「仕切り」についての考察

領域を形成するものとして仕切りについての考察を行った。空間を仕切るとは領域を形成したり、機能や用途の振り分けを行ったりすることである。また、何と何を仕切なのか、その間にどんな関係やキョリを持ちたいのか、ということが仕切りに反映されるのではないかと考えた。つまり仕切るとはキョリをつくることだといえる。日本の仕切りは物理的に強固に分断するものではなく、相互に気配を感じ合うものである。そこには人の認識や意識の上に明確な仕切りが存在している。そして、そこに認識的な余白が存在することでそこに存在するものがそれ以上の広がりを持ち、空間をより豊かなものにするのである。これは日本における人間関係の現われだとも言える。

■敷地とプログラム

敷地は金沢区野島町。南側を海と主要道路が通り反対側を住宅地に挟まれた横長の敷地形状で、住宅地から主要道路にかけて 3m の高低差がある。プログラムはアトリエ空間を持つ共同住宅である。制作活動を行う目的の 25 人前後のアーティストや学生などの住人がひとつながりの空間をシェアしながら暮らす。また住む人や期間に流動性があることもプログラムの重要な特徴であると考えている。

■計画概要/主旨

敷地周辺との関係などから建築的要素である壁や床や天井を事前研究をもとに配置していく。これがこの場所の新たな地形となり、そしてこの地形に自分の居場所をみつけ人々が住み着いていくという感覚である。具体的には、敷地とその周辺との間に仕切り・キョリを確保するためのいくつかの壁を配置する。その壁群は敷地全体にいくつかの場所を形成すると同時に、アプローチや動線の確保などの役割を持つ。同じように床や天井を設け、それぞれに特徴を持ちながら多様な場をつくる。このようにしてできた新たな地形は全体として見れば連続した一体の、しかし部分を見ればいくつもの仕切られた流動的な空間をつくりだす。住人たちは、ここに思い思いにそれぞれの住処を定め、また制作場所としてのアトリエを確保する。キッチンや浴室などは複数点在して設けられ、必要に応じてシェアされる。

囲うことで領域をつくり用途を固定してしまうのではなく、仕切りやキョリを用いながらそれぞれの住人が常に移り変わる余地のある多様な空間をつくりあげていく。そこには空間の密度や人々の生活のシーンが思い思いに現れてくるだろう。ひとつながりの空間でお互いに気配は感じつつも、それぞれの場所でそれぞれの時間をすごしていく。こうした空間の成り立ちでは場の使われ方や関係、距離感などにそこでの人間関係が強く影響してくる。また共に暮らす中で生まれる生活のルールが秩序となりここの生活を成り立たせていく。暮らす人が変わっていくことで、前の人の生活が残り蓄積されていったり、新たな秩序が生まれ生活が変化していったりと、時間や人の流動性の中で常に変化し続け、様々な物語が生まれていく。

単に建物という囲いをつくるということではなく、それぞれがまわりのまちや近所や住人とのキョリをとりながら自分の居場所を決めていくことができる場をつくること。ちょうど公園でシートを広げ思い思いの時間を過ごすように。こうしたお互いの対話の中で生まれる空間を大切にしたい。そうした空間の成立が自然に行われることこそが重要で、人や場所を豊かにすると考えている。